

幼保小接続の取り組みに関する教育方法学的考察
— 広島県における『幼保小接続カリキュラム実践事例集』の分析を中心に —

井辺 和杜¹・七木田 敦²

A Pedagogical Study of Kindergarten–Nursery School–Elementary School Connections:
An Analysis of Practical Case Studies of the Kindergarten, Nursery School, and
Elementary School Connections Curriculum in the Hiroshima Prefecture

Kazuto IMBE¹, Atsushi NANAKIDA²

Abstract: The purpose of this study was to clarify recent trends in the connections among preschools, nursery schools, and elementary schools, and to examine, from a pedagogical perspective, what points are emphasized in the implementation of these connections. To this end, we focused on the Hiroshima Prefecture’s approach and discussed the current trends in connections among these schools. We then analyzed the curriculum described in the “A Guideline with Practical Case Studies of the Kindergarten–Nursery School–Elementary School Connections Curriculum,” by the prefecture. Finally, based on the analysis, we discussed what points are emphasized in the creation of the curriculum from a pedagogical perspective.

Keywords: connections among kindergartens/nursery schools/elementary schools, approach curriculum, start curriculum

I. 研究の目的

本研究の目的は、幼稚園・保育所等の幼児期の教育を担う施設と小学校との接続（以下、幼保小接続¹⁾）に向けた取り組みにおいて、さまざまな地域実態の下でどのような点が重視されているのかを、接続期のカリキュラムの分析を中心に教育方法学的視座から考察することである。

上記の目的から本稿は以下の構成をとる。まず幼保小の接続を巡る動向を取り上げ、その上で特に広島県における接続に関する取り組み支援に着目し、現在までの変遷について取り上げる。

続いて、本県の接続に対する支援の成果として刊行された『幼保小接続カリキュラム実践事

例集』に記載されている地域のカリキュラム分析を行い、地域の展開を果たした取り組みの独自性及び現行の広島県における取り組み支援に対しこれらの独自性の与える示唆について、教育方法学的な観点から考察を行うものとする。

II. 幼保小の接続を巡る動向

幼保小の連携、なかでも幼小連携は「古くて新しい課題」（神長 2017 p.10）と表現されるように、社会的な背景の変化がありながらも常に浮かび上がってくるトピックである。

福元（2014）によると、幼小接続に関しては1971年の中央教育審議会の答申において提示された「幼年学校」（4・5歳から小学校低学年児童までを一貫して教育する場）の構想に始まる「学校体系改革アプローチ」の流れに与するものとして位置付けられてきた。さらに1990年代以降、「小1 プロブレム予防アプローチ」の方途としても検討されてきた。後者のアプローチには、小学校1年生が学校に適應することの

1 山口県立大学社会福祉学部附属子ども家庭ソーシャルワーク教育研究所

2 広島大学大学院人間社会科学研究所附属幼年教育研究施設

難しさが社会問題として報告されることにより、「小1プロブレム」や「小1ギャップ」として認知されてきたことがその背景としてある。

2000年代以降の教育政策としては、2008年改定の幼稚園教育要領解説および保育所保育指針解説書において、指導計画の作成のなかで小学校との連携について記載されていることは特筆すべき事項である（文部科学省 2008a・厚生労働省 2008）。また、同年の改訂において小学校学習指導要領解説 生活科には「第4章指導計画の作成と内容の取扱い」の中で「特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること」といった文言が付加された（文部科学省 2008b pp.50-51）。これを基に「指導計画作成上の配慮事項」の（3）に、「スタートカリキュラムの編成」が新入児童の小学校生活への適応を促し、小1プロブレムなどの問題解決に効果的であるという見解が示されている（同上）。

さらには2016年告示の中央教育審議会による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」において、幼児教育と小学校教育の接続の一層の強化を図ることが重視されていることが示されたことは、各自治体単位での取り組みの強化を促進させるきっかけとなった（中央教育審議会 2016）。

Ⅲ. 広島県における幼保小の接続に関する取り組み支援の動向

Ⅱ. にて取り上げた動向とともに、各自治体単位での取り組み支援は近年強化されつつある。本研究はなかでも広島県教育委員会による幼保小の接続に関わる取り組み支援に着目し、実施の来歴を含めた動向を本節で取り上げる。

本県の特に幼小接続に関する取り組みの最初期にあたるのが、2008年の幼児教育調査研究事業報告書に成果がまとめられている調査であり、以降本県の調査・支援内容に変化はあれどほぼ毎年度報告がなされている。その後、2014年の市町単位での幼小接続の実態調査の結果から、多くの市町で更なる充実した接続・連携が目指されている段階にあることが明らかになった。

この結果を受け本県の教育委員会では、2015年より2年間、5つの地域（三原市・安芸高田市・廿日市市・広島市・熊野町）を研究開発指定地域に指定し、それぞれの実態に即した幼保

小接続カリキュラムの研究開発を実施した。これらの研究開発に関する報告書として2017年3月に提出されたものが、『幼保小接続カリキュラム実践事例集』である（以下『実践事例集』と表記）。本資料についてはⅣ. にて詳述する。

さらに、上記の研究開発と並行して本県教育委員会において主導的に進められてきたものが、2017年2月に策定した「遊び 学び 育つひろしまっ子！」推進プランである。本プランは広島県下の就学前の教育・保育の基本的な考え方とそれを実現するための施策の方向性及び取り組み内容を示したものとして位置づいている（広島県教育委員会 2022 p.1）。第1期を終え、現在第2期が進行中となっている。本プランにおいても幼保小接続の取り組みは主要項目の一つとなっており、より一層の推進が目指されていることがわかる。

以上のプラン・プログラム等をもとに、幼保小の接続に関わる具体的な取り組みとして以下が精力的に行われてきた。まず小学校初任者研修が挙げられる。就学前の保育・教育施設と初等教育の学校文化の違いを知る上で、実際の場に出向き肌でその文化を知ることのできる初任研は、幼保小の接続を進める上で重要な機会になっていると言えよう。続いて幼保小連携担当教員研修である。普段は各学校区にて担当し、他地域の状況を把握しづらい状況にある担当教員たちに対し、互いに交流する機会を保障することは重要な取り組みとして位置づいていると言える。最後に、幼児教育長期派遣研修である。園所と小学校相互の訪問回数を増やすのではなく、小学校教員が1年間の派遣研修を行うことは、年間を通じたカリキュラムの意図や実際の実施状況を学ぶ上で非常に重要な機会を提供していると言えよう。さらに小学校教員が研修を終えたのち、各校もしくは地域単位での連携担当教員としての役割を担うことまでを見通したとき、本研修のプログラムは接続に関するミドルリーダーの養成という面から意義のある取り組みとして捉えることができる。本研究の主目的からは外れるためこれ以上言及しないが、県内で幼保小の接続に向けた様々な支援が並行して行われていることを踏まえておく必要があるだろう。

さらに昨年度より、上記に加え「育ちと学びをつなぐ」幼保小連携・接続の充実事業を実施しており、複数の市町に委託するかたちでプロジェクトが進行している。なお、本プロジェク

トを含めた幼保小の接続にかかる多くの取り組みは文部科学省の「幼保小の架け橋プログラム」に採択されたものであるため、接続期の支援に向けて一層の充実を図っている段階にある。

ここまで広島県における保幼小接続に関する支援の変遷を取り上げてきた。次節では、そのなかで2015年からの2年間研究開発が進められてきた小学校区単位のカリキュラムの分析を行い、地域的展開を果たした取り組みの独自性及び、現行の広島県における取り組み支援に対してこれらの独自性の与える示唆について、教育方法学的な観点から考察を行う。

IV. 広島県下の研究開発指定地域における取り組みの分析

分析対象である『幼保小接続カリキュラム実践事例集』は、「指定地域の研究内容や、本県の幼保小接続カリキュラムの考え方などについてまとめたもので、子供達が持っている力を伸び伸びと発揮し、新しい生活を主体的に創り上げていくことができるようになるために、どのように保幼小の接続を進め、接続カリキュラムを創っていくかを示したガイドブック」(広島県教育委員会 2017a はじめに)として発行されたものである。なおここでの「幼保小接続カリキュラム(以下、接続カリキュラム)」とは、「幼稚園・保育所・認定こども園が中心となって編成する年長児のカリキュラム(アプローチカリキュラム)と、小学校が中心となって編成する小学校第1学年のカリキュラム(スタートカリキュラム)の「つながり」、「接続」を意識して編成されたカリキュラム」(同上 p.2)として広島県教育委員会において規定されているものである。

本書の構成は「接続カリキュラムの考え方を理解しよう!」から始まり、「接続カリキュラムを創ってみよう!実施してみよう!」、その上で「具体的な実践事例」において「研究開発地域の取組」をモデルカリキュラムとして提示するなど、担当者(保育者・小学校教員)が初めて接続カリキュラムを作成する上での手引き書となっていることがわかる。その際、研究開発地域の取り組みは実践事例という位置づけで、接続カリキュラム、週案やカリキュラムに記載されている事例など、豊富な資料とともに掲載されており、作成の際の参考として取り扱われている。

以下では、研究開発地域であった2つの小学

校区の事例を取り上げ、接続についての取り組み及び接続カリキュラムについての分析を行う。

IV-1. 広島市 A 小学校区のケース

1) 広島市の幼保小接続に関わる取り組み

広島市は県内の西部に位置する県庁所在地である。県内総人口の約4割にあたる118万人を擁する政令指定都市であり、中国・四国地方の中核都市として位置づけられており、行政、金融、卸売、サービス業等の第三次産業の比率が高い自治体となる。

以上の特徴を有する本ケースにおいては、接続カリキュラムの作成・実施・評価・改善といった一連のマネジメントに先駆け、連携の際の共通事項としてキーワードが設定されていた点がまずもって特徴的であった。カリキュラムの作成以前の段階として組織を立ち上げる際にこのような共通事項があることは、円滑に組織を運営していく上で重要な要素となっていると言えるだろう。

その際のキーワードとなっていたのが、「3つのつなぐ」という表現であり、具体的には①子どもをつなぐ、②組織をつなぐ、③カリキュラム・事例でつなぐ、で構成されている。特に②組織をつなぐという視点においては、幼小合同の指導案の検討や振り返りといった計画段階での交流、小学校教員の保育所体験など、接続カリキュラムを円滑に実施していく上での保育者-教員間の相互交流を果たす上で機能していたと捉えられる。一方で①子どもをつなぐ、③カリキュラム・事例でつなぐという視点は、児童と園児の交流活動を中心に据えた接続カリキュラムという特徴に表れているように、活動内容自体に大きく影響を与える結果となっている。

このような連携の上でのキーワードを踏まえ、本ケースではどのような接続カリキュラムが計画・作成され、実施、評価、改善に至ったのであろうか。

2) 接続カリキュラムの分析

本ケースの接続カリキュラムを掲載する(図1)。まず「接続の視点」として共有されているのが、「自分がやりたいことを見つけ、それに向って本気で取り組もうとする子ども〜「かわかり」「やくそく」の視点から〜」というものであった。この視点が特に色濃く反映されているのが、事例①として報告されている「すな

やつちとなかよし」という5月の取り組みであった(広島県教育委員会 2017c)。本事例は1年生と年長の園児との交流活動として実施された。

本時は児童が幼稚園に訪問し、児童と園児がペアとなって砂場遊びや泥だんご作りを一緒に行うことが主な活動となっていた。そのなかで特に「接続の視点」が反映されていたのは、活動の導入において保育者と教員がペアになり、活動を行う上での「やくそく」を行うシーンをロールプレイしていたという場面である。そこでの「やくそく」とは、①手をつなぐ(場所移動は一緒に)、②相談する(遊びは話し合っ決めて決める)という二つであった。このような保育者・教員によるロールプレイにより、活動に入る前にペア間での「やくそく」ごとを取り決めるための自然な導入が促されたものと捉えられる。

そして本時の主活動が砂場遊びや泥だんご作りであったことも、接続のもう一つの視点となる「かかわり」を捉える上で、重要な意義があったと言える。特に幼児版の事例報告にて「経験させたい内容や大切にしたい育ちの視点」の一つとして「砂や土、泥の感触を楽しみ、友達と一緒に考えたり工夫したりして遊ぶ」というものが掲げられている。この視点にあるように、自然物としての砂や土、泥のもつ特殊性を遊びのなかで友達と共に楽しむことが本活動のなかで重視されていることがわかる。

本時の活動においては、「砂場にできた水溜りに足を浸けて、「ああ気持ちいいな」と満足げな子供達の姿があった」という記述や、「遊び場所を移動せず、ずっとどろだんごを作り続けているペアがいた。やりたいことにじっくりと取り組むことができた」などが「児童の姿」として記述されていた。このように子ども同士が共に活動に没頭する姿を引き出した要因として、泥だんごや砂場での遊びのもつ独特な魅力にあることは明白であろう。そしてその際の指導の工夫として、「水やといを使うタイミングを図る。初めから使わせるのではなく、子供の気持ちが高まったときに使わせて、意欲が持続するようにする」といった支援の方法も、遊びがダイナミックに展開するきっかけとして作用していたと言える。以上のように、本ケースにおいては年度初めの交流から「かかわり」「やくそく」の視点といった「接続の視点」が意識された取り組みがなされていた。

さらに2年間の研究開発期間において、カリキュラムマネジメント的な取り組みも見られた。特に評価・改善という点に着目すると、11月に実施された事例③「たのしいあき いっぱい」において、一年目の反省を踏まえた変更点が見出される。

本時は小学校の科目を横断した構成が採られており、園児と共に「こうえんであきをみつけよう」(生活科)という全体の前半部にあたる活動では、事例①の「交流時の問題点をふまえ、ペアを見直し新たにペアチームを編成した」という変更が報告されていた。さらに2年目の実施においてもさらなる変更があり、一年目は一グループ児童7、8人につき園児1人という編成から、2年目には児童2人につき園児1、2人という、より親密な交流が可能になることで相手を意識させるという編成への変更がみられた。

加えて、活動の後半部にあたる「どんだんならべて」(図画工作科)という活動においては、小学校の視聴覚室にて公園から持ち帰った秋を感じさせる自然物(どんぐり・落ち葉など)を並べ、構成遊びを行うという展開があった。その際も、一年目は模造紙2枚の上で並べるといった比較的展示的な意味合いの強い活動として規定されていたものを、2年目は床に並べてもよいことにするという変更がなされた。これにより、結果的に2年目の活動では「最後は全体で1つの大きなめいろ」を完成させるなど、遊びが既存の枠(遊びのルール・物理的な範囲)を越え、ダイナミックに展開できるきっかけがこの変更点から生まれることとなっていた。

このように本ケースにおけるカリキュラムマネジメント的側面からの取り組みは、ペアの人数調整や準備物の充実といった具体的な活動内容をより充実させることを目的に行われていた。結果としてその変更点は園児と児童がより親密に交流できたり、子ども全員で「1つの大きなめいろ」を完成させたりするなど、充実した活動を生み出すきっかけを生み出すターニングポイントになっていたと捉えられる。

IV-2. 熊野町のケース

1) 熊野町の幼保小接続に関わる取り組み

熊野町は広島県の西部に位置し、広島市、呉市、東広島市に隣接している。人口は約2,300人であり、わずかに減少傾向にある。筆の全国一のシェアを誇る熊野筆の産地として製造が盛

んであり、四方を山に囲まれた熊野盆地を中心に広がる自治体である。

本ケースの幼保小の接続に関わる取り組みの特徴としては、「町全体での連携」という点が挙げられる。2013年より幼保小中教育推進協議会を立ち上げたことから、本町における接続の取り組みが本格的に始動した。本協議会では町内全ての小学校（4校）、保育所（4園）、幼稚園（3園）が一堂に会し、接続における共通整備を行ったことが報告されている。さらに協議会のなかに幼保部会を個別に設定することにより、小学校との縦の連携だけでなく、接続に向けた共通の理解を進めるための横の連携に向けた取り組みも継続されてきた。このような全体的な枠組みとして評議会が機能することで、年間計画を町単位で推進している点が、本町の接続に向けた取り組みの特徴となっている。

2) 接続カリキュラムの分析

幼稚園・保育所から高等学校までのつながりを町全体で見通している熊野町において、保幼小の接続に向けて重視されているのが「聞く・話す、あいさつ、読書」など、コミュニケーションにかかわる街全体の連携を通して」という視点である。本町のアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムをそれぞれ掲載する（図2・図3）。

この視点に基づく活動を計画するために、本町の保育所・幼稚園共通のアプローチカリキュラムにおいては「聞く・話す」「あいさつ」「読書」の要素を、年間の活動内容の三つのカテゴリとして記載している。これにより、例えば4月から8月までの「聞く・話す」の軸上に、「保育者や友達に思いを伝える」「ごっこ遊びの会話を楽しむ」「友達が困っていたら気持ちを聞こうとする」といった「聞く・話す」のカテゴリに関する子どもの具体的な姿が記載されている。

このように本町のカリキュラムでは、上記のカテゴリが前景化し、そのなかに各活動が位置づくといった形式を採っている。そのため個々の活動を中心とした広島市のカリキュラムとは異なった記載方法となっている。それは7つの保育所・幼稚園が一つのアプローチカリキュラムを作成するという本町の方針が反映された結果、各園所の個々の活動をそれぞれのカテゴリに配置していくような枠組みとして機能させるためであると推測される。

そして内容に加え「育ってほしい幼児の姿」もまた、三つのカテゴリに分化した上で、大きく4期に区分されている。これらの姿は段階的であり、これらが（5分、10分といった）客観的な基準かつ、（うなづくや拍手といった）具体的な動作とともに記載されている点も特徴的である。こちらも、複数の園所が同じカリキュラムを使用するという独自性により、「幼児の姿」を判断するうえで共通理解を図れるよう、明確な基準のある記述内容になっているということが大きな要因として挙げられよう。

以上がアプローチカリキュラムの特徴である一方、小学校側の作成したスタートカリキュラムには以下の特徴が見出された。接続の視点から「4月当初の児童の姿」という状況が記載されていた。そこにはアプローチカリキュラムと共通する三つのカテゴリがあるなかで、具体的な姿に園所のアプローチカリキュラムの最終期（およそ12～3月）に記載されていた「幼児の姿」が反映されている。例えば「聞く・（聴く）・話す」のカテゴリにおいて、「人の話を5～10分集中して聞くことができる」とあり、この姿がアプローチカリキュラムの最終期にもあることから、達成された姿を引き継いだ上でのスタートであることが把握されていると言える。

V. 幼保小の接続に関する取り組みの多様な展開

改めて本研究で取り上げた広島市A小学校区・熊野町の事例を通覧すると、接続に向けた取り組みに対する捉え方がそれぞれのカリキュラムに反映されていることがわかる。

広島市は接続の視点が「3つのつなぐ」であったことで、園児と児童の「交流」が活動の中心となった結果、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムが互恵的な「交流」活動を中心とした一枚絵のカリキュラムとして記載されるようになっていた点が独自性へとつながっていた。

一方で熊野町においては、幼保小中教育推進協議会のリードのもとで、複数園所間で共通のアプローチカリキュラム、複数の小学校間で共通のスタートカリキュラムを計画、作成する方式が取られていた。これにより個々の活動を位置づけるためのカテゴリが前景化したカリキュラムとして構築されていた点が特徴的であった。このようにそれぞれの自治体において、接続のための適切なアプローチが模索されてきた

という過程があったからこそ、『実践事例集』上の接続カリキュラムに多様さが反映される結果となっていたと捉えられる。

以上の『実践事例集』における取り組みの分析の結果見出された特徴や独自性は、現行の広島県の取り組みとの間にどのような関連や示唆が見出されるだろうか。例えばⅢにて取り上げた「架け橋プログラムに関する調査研究事業」の2022年度の事業内容・成果では「再委託市町を含む各市町で、幼保小連携協議会及び幼保小合同研修会を設置、内容の充実」（文部科学省2023a）を図ったことが報告されている。このような協議会の設置に関しては、本ケースで取り上げた熊野町の幼保小中教育推進協議会が先進的に設置・運営されてきたことを踏まえると、資料から確認することはできなかったものの、これまでの取り組みの結果が生かされた事業内容となっていることが推測される。

加えて同資料に記載されている「架け橋期のカリキュラム（案）」のなかで強調されているのが、「共通の視点」である（同上）。これは『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）』（文部科学省2023b）において規定されている用語である。

一方で『事例集』においても、「接続の視点」や「子どもの姿」など、用語としては異なるものの、接続の取り組みの際に重視されてきたポイントがあった。なかでも広島市A小学校区の「3つのつなぐ」といったキーワードは、カリキュラムマネジメントだけでなく運営協議会を推進する上でも作用するなど、直接教育活動に関わる内容と接続のための運営・連携を一体的にするためのものとして位置づいていた。

このような広島市A小学校区の縦断的な発想を適用するののかについては、地域の実態に合わせた十分な検討が必要となるだろう。しかし接続カリキュラムの独自性が他機関との関わりが必須要件となることにあるならば、組織として運営していくという意識を備えておく必要がある。その意味でこれらの取り組みを一体的に捉え、縦断的にキーワードを設定する姿勢は、接続の視点がカリキュラム内に留まってしまう可能性を超えるものとして評価できる。このように、接続にかかる運営からカリキュラムマネジメントまでを巨視的に捉える素地のある本県の今後の取り組み支援においても、これらの視点が生かされていくことが求められるだろう。

最後に、本研究の限界と今後の課題について

述べる。本研究では、開発研究指定地域としての実施期間から一定の年数を重ねた現在において、接続にかかる取り組みがどのように対象地域において引き継がれ、また修正がなされつつ実施されているのかといった点から検討することができていない。よって今後の課題としては、現状の実態調査を含めた接続にかかる取り組みの検討が必要である。

注

- 1) 本研究では、保育所・幼稚園・認定こども園等の「幼児期の教育を担う施設」と初等教育を担う小学校とのカリキュラムを通じて連続した実践活動を、主たる対象資料となる『幼保小接続カリキュラム実践事例集』において用いられている「幼保小接続」という語に準じて用いるものとする。よって以下では「幼保小」及び「接続」の用語を用い、先行研究で用いられている場合のみ、「保幼小」、「連携」等の表現を使用する。

引用文献

- 中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧日：2023年9月26日）。
- 福元真由美（2014）「幼小接続カリキュラムの動向と課題—教育政策における2つのアプローチ—」、『教育学研究』81巻4号、396-407頁。
- 広島県教育委員会（2017a）『幼保小接続カリキュラム実践事例集』<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/238493.pdf>（最終閲覧日：2023年9月26日）。
- 広島県教育委員会（2017b）「実践事例4 1年間のスタートカリキュラム」<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/238004.pdf>（「1年間のアプローチカリキュラム」と同じ内容）（最終閲覧日：2023年9月26日）。
- 広島県教育委員会（2017c）「実践事例4 実践事例」<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/238040.pdf>
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/238040.pdf>（最終閲覧日：2023

- 年9月26日)。
- 広島県教育委員会 (2017d) 「実践事例5 1年間のアプローチカリキュラム」 <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/238074.pdf> (最終閲覧日:2023年9月26日)。
- 広島県教育委員会 (2017e) 「実践事例5 1年間のスタートカリキュラム」 <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/238005.pdf> (最終閲覧日:2023年9月26日)。
- 広島県教育委員会事務局 (2022) 「『遊び 学び 育つひろしまっ子!』推進プラン (第2期)」, <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/474506.pdf> (最終閲覧日2023年9月26日)。
- 広島県教育委員会 (2023) 「幼児教育ー幼保小連携・接続」 <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/youji-04-renkei.html> (最終閲覧日:2023年9月26日)。
- 神長美津子 (2017) 「小学校との接続・連携の歩み」, 『保育ナビ 2017年10月号』フレール館, 10-11頁。
- 厚生労働省 (2008) 「保育所保育指針解説書」 <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf> (最終閲覧日:2023年9月26日)。
- 文部科学省 (2008a) 「幼稚園教育要領解説」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/youkaisetsu.pdf
- 文部科学省 (2008b) 「小学校学習指導要領解説 生活科」 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2009/06/16/1234931_006.pdf (最終閲覧日:2023年9月26日)。
- 文部科学省 (2023a) 「幼保小の架け橋プログラム 事業 各自治体の取組概要資料 広島県」 https://www.mext.go.jp/content/20230828-mxt_youji-000023526-4.pdf (最終閲覧日:2023年9月26日)。
- 文部科学省 (2023b) 『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版)』 https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf (最終閲覧日:2023年9月26日)。